エレナ・レーリヒの手紙

1930年6月24日

最後の手紙の中で、あなたは、自分に任された部門の管理について、すべての同僚が自分で責任を負っていることがいかに幸せであるかを強調しています。個人的な責任を自覚することは非常に正しいことですが、協力についてもお聞きしたいのです。私の責任感は、あなたと少し違うかもしれません。個人的責任というのは、広範な協力と結びついているだけでなく、本当のことを言えば、この協力あるいは協調が個人的責任の基礎になるのです。宇宙は協力の上に成り立っています。人間は宇宙の一部であり、その反映ですから、自滅を望まなければ、この法則から自分を排除することはできません。各機関は、共働者の１人をトップとして、他のすべての部門や機関とできる限り協力しなければならないのです。すべての部門は同じ計画に従って働き、同じ手の指のように、邪魔をせず、助け合い、補い合うように働かなければなりません。１つの部門が協力から脱落することは、ある種の弊害に似ています。このような場合、適切な処置を施さない限り、全体的な崩壊を招くことになります。

　もし責任とは撤退や独立した行動であると考えるなら、あなたは野心や所有欲を隠し持っていることになるのです。そして私たちは、そのような感覚がすべての教師によっていかに否定されているかを知っています。私たちは、あらゆる面で所有者意識を自分の中で破壊しなければ、次のステップに容易に到達することはできないのです。自分の部門だけでなく、教え子や知人まで所有欲の対象にしてしまうこともあるでしょうし、協力者の中にも彼らに興味を示す人がいれば、傷つくことになります。

　奴隷所有者の態度は所有欲からくるもので、それを払拭するのがいかに難しいかはご存じのとおりです。しかし、「世界の母」の時代、つまり最大限の協力の時代に、そのような先祖返り（後戻り）が許されるのでしょうか？

　団体や制度は、私たちの個人的な利益のために存在するのではありません。したがって、私たちはそれらすべてを発展させるための全般的な計画に従って働かなければなりません。団体や制度の意義を高めることによって、私たちは自分を高めることができますが、もし私たちが自分の人格を高めることを第一に考えるなら、団体や制度を弱め、私たち自身を破滅させることになるでしょう。

　私の指示は、一部の人には嫌われるのではないかと恐れていますし、そう思う理由もあります。しかしこう言われています。「教えは癒しの水飴でもなく、銀の馬鍬でもない。それは自己を厳しく磔にすることであり、最高の火を通して自分の低次の性質を緊張して変容させることである。教えは自己否定という厳しくも美しい花を必要とするのである。癒しの水飴を好む人は、自己否定を選ぶ人のために用意された火のような食べ物に手を出さないほうがよいだろう」。

　そう、すべての暗がりを照らし、昨日の埃を一掃しなければならないのです。そうでなければ、次のステップを築くことはできません。

　厳しい指摘をお許しください。心をこめて書いています。私はあなたを助け、あなたに新しい理解を与えたいと思います。甘い言葉は私たちの意識を眠らせ、無知を深めますが、無知は停滞であり、後退なのです。師匠に喜びを与えてください。喜びの上昇を理解しようとするあなたの熱烈な願望を、師匠に見てもらいましょう。この新しい道を、厳しい自制心を持って踏みしめてください。より高い喜びの基礎は、苦しみに満ちています。「苦しみは喜びに先立つ」。このことを忘れないようにしましょう。

　同じ努力で団結した魂は、１つの鎖を構成しています。同じ教えによって結ばれたこの鎖は、決して切れることはありません。